

## 生涯学習へ発展する体育授業の試み：ソフトバレーボールの指導を例として

著者	竹田 唯史，北村 優明
雑誌名	生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	2
ページ	119-129
発行年	2002-01-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002422/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002422/</a>

## 生涯学習へ発展する体育授業の試み

—ソフトバレーボールの指導を例として—

Physical Education for Lifelong Learning : the Case of Soft-Volleyball

竹 田 唯 史

Tadashi TAKEDA

北 村 優 明

Masaaki KITAMURA

### I は じ め に

一般に、体育のねらいとして、「体力・健康の維持・増進」、「身体への気づき」<sup>1)</sup>、「運動（スポーツ）文化の継承・発展」<sup>2)3)</sup>などが主張されている。「体力・健康の維持・増進」は、人間の根本的な「生きる」ための基礎体力や行動体力などを向上し、健康の維持・増進を体育の目的とするものである。「身体への気づき」は、自分の身体の調子や状態を知り、それをコントロールし、自分の意のままに動かすことのできる身体の形成を目的とする。「運動（スポーツ）文化の継承・発展」では、人類が長い歴史の中で創造・発展・継承させてきた様々な運動（スポーツ）文化を享受するための技術習得を中心に据え、それらを通して生涯学習へと発展するための基礎学力の形成を目的とする。

筆者は、この「運動（スポーツ）文化の継承・発展」という立場を中心に据えて体育授業を展開している。その理由は、数学や理科・英語などの他の教科においては、その該当科目の学問体系から教育内容を構成している<sup>4)</sup>。つまり、数学であれば、「数学」という学問体系から学習者の発達や認識に応じて必要と思われるものを教育内容として構成している。したがって、体育においても本来、「体育学」における学問体系から学習者の発達・認識に合致した教育内容を構成すべきである。しかしながら、「体育学」の学問体系が未確立の現在では、それができていない。そこで、現在の体育においては、人類が長い歴史の中で継承し、発展させてきた「運動（スポーツ）文化」を中心として、そこから教育内容を構成している。

「運動（スポーツ）文化」はルールや施設、技術、組織などといった要素から構成される<sup>5)</sup>。この「運動（スポーツ）文化」が様々な改善を伴いながらも、現在まで継承されているのは、それらに何らかの「文化的価値」があるからである。文化的価値とは、人間にとっての自己向上性や自己充足性や発達性・変化可能性といった「魅力」である。つまり、バレーボールが多くの人々に親しまれるのは、バレーボールという競技に人々を感動させたり、自己発達させたり、自己充足させるような魅力があるからである。これらはその運動（スポーツ）文化の独自の「おもしろさ」で、その運動文化を発達・変化させる原動力となるものであり、その

運動（スポーツ）文化の「本質的価値」と考えている。この「本質的価値」を確実に学習者へ伝え、それを認識することをしなければ、学習者はその運動（スポーツ）文化の面白さ、楽しさを感じることができない。その魅力や楽しさを感じることができなければ、その運動（スポーツ）文化を自主的に学校教育以外の場面で積極的に取り組もうとはしない。したがって、生涯学習に発展することがなくなってしまう。学校教育を生涯学習へ発展するための基本的な準備と考え、多様な生涯学習へ発展する可能性を保証するためには、その運動（スポーツ）文化の「本質的価値」をしっかりと学習者へ伝える必要がある。

この「本質的価値」と密接に関連するのが、やはり「技術」である。運動（スポーツ）文化はそれらを「見て」楽しむという側面もあるが、基本的には、それらを実際に「する」必要がある。実際に「する」ことによってのみその文化の「本質的価値」を知る（感じる）ことができるのである。したがって、その運動（スポーツ）文化の「本質的価値」を認識するためには、実際に行ってみることが必要である。そのためには、それを行うための「技術」をしっかりと習得し、その運動（スポーツ）文化の「本質的価値」を認識する必要がある。しかし、この「技術」は、あくまでも学習者がその運動（スポーツ）文化の「本質的価値」を認識するための「技術」であり、いわゆる「勝利至上主義」や「根性主義」とつながる「技術」の習得をさせているのではない。技術を習得することによって、その運動（スポーツ）文化の本質的価値を知る（感じる）ことが主目的なのである。以上の理由から、筆者は、運動（スポーツ）文化を継承・発展し、技術習得を中心に据え、生涯学習に発展することを体育の中核的な目標と考える。

本論では、このような基本的な立場で、体育授業を実際にどのように展開していくかを、実例を上げながら論じる。本論の構成は、まず、「運動（スポーツ）文化」の本質的価値をすべての学習者へ保証するための、教授理論を展開し、それにもとづき、ソフトボールを例とした実際の体育授業における教授理論と教授プログラムを示す。そして、実際の授業の実践結果を報告する。

## Ⅱ 授業構成の方法論

ここでは、ある一つの運動（スポーツ）文化を教材とした場合の教育目標、教育内容などの構成をどのような方法論によって行うかを述べる。基本的な方法論は、高村泰雄<sup>4)</sup>、鈴木秀一、須田勝彦<sup>6)</sup>らの考える「授業書」方式による教授学理論に基づき、それらを体育・スポーツへと応用させた井芹武二郎<sup>7)(8)(9)</sup>、進藤省次郎<sup>10)</sup>らの方法論に学んでいる。

まず、「授業書」とは、「『仮説実験授業』のなかではじめて使われたもので、それは一種の指導案・教科書・ノート兼用の印刷物であり、授業の進行について具体的な指示を与え、その指示どおりに授業を展開することを要求する」<sup>4)</sup>ものであり、「教育内容と教材の順序構造に関する授業の法則性の仮説がもり込まれて」おり、「誰でもが追試可能な形で客観的に提示」されたものである。授業書とは、生徒と教師が兼用するものである。しかし、体育授業において

は、教師の側が主に使用するものであり、また、学習者が直接書き込むといったことがあまりおこなわれないため、「教授プログラム」という名称を使うこととしている。しかし、先述した「授業書」の基本的な性格は引き継ぐものとする。

この教授プログラム作成にあたっては、教育目標論、教育内容構成論・授業過程論、授業評価論の3点が中核的な内容となる。

教育目標論においては、学習時間や学習者の発達・認識の水準に応じたものを定める必要がある。ここで最も重要なことは、「授業実践においてその善し悪しが検証できるようなものとして設定」<sup>4)</sup>されていることである。

教育内容は、「現代科学の一般的・基本的概念や法則」から、「すべての生徒に教えることが可能であるという検証を経たもののみにによって構成」され、それらは、「すべての生徒に理解可能な順序（＝認識過程の法則性）」によって再構成される必要がある。運動（スポーツ）文化を対象とした場合は、具体的な技術内容が中心となって教育内容として構成される。この技術を客観化し、その構造を明確化することをしなければ、教師の経験やカンに頼った経験主義的な指導になったり、技術習得が順調に行かない場合、学習者の側の問題としてしまう。

そして、教育内容を確実に学習者に習得させるために、学習者が直接対峙する教材が構成される。

授業過程においては、学習者の認識活動が行われ、また、学習者相互間でその技術習得・認識を共有する「歴史的・社会的過程」<sup>4)</sup>が行われる。他者の学習活動の様子を認識することによって、自分の習得過程を客観化することができ、より効果的に技術の認識・習得が進むのである。

授業評価においては、「授業の目標、教育内容構成・授業過程を含む授業の過程全体を評価すること」<sup>4)</sup>である。具体的な評価手順としては、「授業過程が授業書の指示したとおりに進んだかどうか」、「適切な評価問題によって学習者の達成度を評価する」、「生徒の感想文によって授業が歓迎されているかを評価する」<sup>4)</sup>。

### Ⅲ ソフトバレーボールの教授理論

以上のような基本的な教授理論に基づき、筆者は、ソフトバレーボールを指導する際の教授理論を以下に述べる。授業の対象は、北海道浅井学園大学生涯学習システム学部健康プランニング学科1年生のうち体育実技A（ニュースポーツ）の授業を選択した男子36名、女子35名である。多くの受講生がスポーツ系のクラブに所属し、将来は体育教師を目指す者達であり、運動能力は高い者が多い。男子の授業は、平成13年4月25日～6月6日の間に毎週1コマ（90分）で合計6コマ行われた。女子の授業は、平成13年6月13日～7月11日の間に毎週1コマ（90分）で合計5コマ行われた。



## 1. 教育目標

これらの対象者に対する教育目標として、学校体育同志会が提唱するバレーボールの理論<sup>11)</sup>に学び、「3段攻撃によるアタック攻撃とその防御によるゲームの習得」を位置づけた。これは、バレーボールの一番の面白さ・醍醐味としてアタック攻撃があげられ、それを一部の部活動経験者のみが行うのではなく、全員がそれをできるようになり、その防御であるブロックも含めたゲームができることを目標として位置づける。そのことによりバレーボールの面白さを享受し、生涯学習へ発展することができると考えた。ここでは、クイックや時間差などの変則的なアタックではなく、基本的なオープンからのアタックを位置づける。

## 2. 教育内容

教育内容を以下に構成する。

- 1) アンダーハンドパスの技術
- 2) オーバーハンドパスの技術
- 3) サーブ技術
- 4) 3段攻撃に発展するためのゲームにおけるパスの技術とサーブの技術
- 5) 防御的パスの戦術
- 6) アタック技術
- 7) ブロック技術
- 8) 試合における基本フォーメーションと心理的要因

それぞれの内容について説明する。

### 1) アンダーハンドパスの技術

肩関節の変化によってボールをパスするのではなく、肩関節を固定し、膝の屈伸でボールをパスする動作を習得する。肘関節を伸ばすこと、ボールの当てる位置などが内容となる。

### 2) オーバーハンドパスの技術

準備動作の少ない押し出し動作主体の「はじく」パスではなく、肘関節を伸ばした姿勢で待ち、手首・肘・膝関節の屈曲によってボールの吸収動作を含むオーバーハンドパスを習得する。

### 3) サーブ技術

ここでは、ボールのセット方法、トスの方法、打つ方法を学習する。具体的には、両脚をネットと直角に立ち、腕を伸ばしてボールをセットし、胴体の長軸を中心とした回転とそのひねり戻し動作によって、打つ腕をしっかりと伸ばして打つ、ボールへ当たる場所やスウィングの方向や速度によってボールの方向や勢いに変化する。また、セットするボールの位置によっても打球の方向が変化するという内容を内容として位置付ける。

### 4) 3段攻撃に発展するためのゲームにおけるパスの技術とサーブの技術

試合中に3段攻撃つながるようなレシーブとパス、サーブ技術を内容とする。まず、はじめのサーバーは初歩的なサーブ技術を学習する。レシーバーは、サーブされたボールの空間における認識とセッターへのパス技術を学習する。前衛の右側は、サーブボールに対する空間認識と自分が捕らない場合の後へのターン技術とアタッカーへのトスを学習する。前衛の左側はオーバーハンドパスによるネット越えによる返球の技術を学習する。

この基本連続パスにより、3段攻撃をするための基本的な技術を学習できる。単なるオーバーやアンダー、あるいは円陣パスの後に即座にゲームを行った場合、試合がうまくいかないケースが多い。これは、まず、相手サーブが今までのパス練習よりも遠いところから行われるので、そのボールの空間認識が形成されない。あるいは、レシーブをセッターに返す意識や技術がなく、相手コートに直接返したり、あるいは目的が無くレシーブをすることとなり、3段攻撃へと発展しづらい。つまり、学習内容に飛躍があり、コートや試合で必要な技術や認識を習得させることができていないのである。本理論では、その点を改善するために、このような内容を位置づけた。

#### 5) 防御的パスの戦術

ネット型のボールゲームの場合、アタック攻撃などによって積極的に得点をとる方法と、相手のミスによって得点を得るといった2通りがある。この授業においては、最終的にはアタック攻撃によって積極的に得点を狙うことを目的とするが、その前段階として、まずは、基本的なイージーボールを確実にコントロールし、ミスをしないということを学習する。これができなければ、相手に不要な得点を与えてしまうし、また、3段攻撃にも発展していかない。ここでは、アタックをしないで、前項の3対3でゲーム形式で行う。

#### 6) アタック技術

相手のミスを待つ防御的なゲームにおいては、ゲーム時間が長くなり、お互いが同じくらいのレベルの場合、なかなか決着がつかなくなる。そこで、アタック攻撃を導入することにより、より積極的に得点ができることを学ぶ。また、それはバレーボールの楽しさ・醍醐味であり、学習者がバレーボールの本質的な楽しさを感じることができる。

アタックの具体的な技術としては、打つ腕の肘関節を肩よりも挙げた準備動作と打たない腕の伸ばし動作による準備動作からの肘の伸展による打球動作。

#### 7) ブロック技術

アタック攻撃に対する防御技術を学ぶ。具体的には、ネットタッチをしないでの準備体勢、ジャンプの位置とタイミング、手首の屈曲動作である。

#### 8) 試合における基本フォーメーションと心理的要因

基本フォーメーションの内容として、サーブ時はネットにつく、レシーブ時はネットより離れ、他のメンバーとダブらないようにすること、ボールをレシーブしないと判断した場合は、レシーバーの方へターンして身体を向けることを学習する。また、試合において、失敗などが続き、精神的に落ち込んでくると身体の動きも悪くなり、相手のペースとなってしまうため、

得点した時は、積極的に喜び、失敗したときは「ドンマイ」といって気にしないようにすることを指導する。

以上のように、基本的なパス技術から、必要最小限でアタック攻撃へとつながる内容を構成し、また、攻防の質的发展の原理<sup>13)</sup>に基づきながら、後半の内容を構成した。

### 3. 授業構成論

ここでは、教育内容を含み、学習者が直接認識の対象として取り組む教材の順序構造と教授プログラムの骨子を紹介する。具体的な授業展開と教材を表1に示す。

表1 授業展開と教材

コマ	教 材
1	1-1 アンダーハンドパス 1-2 オーバーハンドパス
2	2-1 3段攻撃に発展するためのゲームにおけるパスの技術とサーブの技術 2-2 防御的パスゲーム (3対3)
3	3-1 アタック 3-2 アタックを用いたゲーム (3対3)
4	4-1 ブロック技術 4-2 ブロックを用いたゲーム (4対4)
5	リーグ戦
6	リーグ戦

(女子は5コマのため、4コマ目からリーグ戦を実施する)

教授プログラムの骨子を示す。

#### 1-1 アンダーハンドパス

ねらい： アンダーハンドパス技術の習得

内 容： ①初心者には膝の屈伸が無く、肩角の変化でボールを打つが、上級者は肩角を固定し、膝の屈伸によりボールをパスすることを示範する。肩角の変化で打つボールは低いライナー性のボールとなるが、膝の屈伸によつてのパスはボールが上へ上がることを示す。また、ゲームにおいて上へボールを上げることの重要性を説明する(次の人につなげるため)。②次に基本姿勢でボールを前腕部に当てることを学習する。基本姿勢は、足を左右に肩幅程度開き、膝を軽く曲げ、両手を重ね合わせ、両腕を伸ばして、肘をしばらく出し、肩角度を90度程度として構える。ボールの落下に先行させて、膝を曲げながら、ボールを前腕部に当てる。③次にボールの落下に合わせて膝を伸ばして、ボールを相手にパスをする。低いライナー性のボールではなく、上へ上げることを目的とする。

方 法： ①学習者の一人にボールを投げてもらい、初心者と上級者の動作の違いをそれぞれ2、3回づつ示し、学習者にどこが違うかを問いかける。②二人1組となり、3mほど離れ、一人が相手の受けやすい山なりボールを投げて各自20回行う。③②の方法と同じく行う。

## 1-2 オーバーハンドパス

ねらい： オーバーハンドパス技術の習得

内容： ①初心者と上級者の違いを示範する。初心者は膝を伸ばしたまま、肘を曲げて構え、ボールが来たら、肘を伸ばして「はじく」パスを行うが、上級者は膝を伸ばして、腕を伸ばして待ち、ボールの落下に合わせて、膝・肘・手首を曲げながらボールの勢いを吸収し、そして、膝・肘をのばしながら、パスすることを示す。②基本の構えからボールをキャッチする。基本の構えとは、足を左右に肩幅程度開き、両腕を伸ばして上方に構え、両手の親指どうし、人差し指どうしを合わせて、両手で「窓」を作る姿勢である。この姿勢からボールの落下に合わせて、膝・肘・手首を曲げながらボールをおでこの上でキャッチする。キャッチした後、あごの位置へボールを持っていかないように注意する。キャッチ後、両膝と肘を伸ばしながら、ボールを相手に高い山なりボールで返却する。③キャッチする前にターンして方向を変えてからキャッチする。④キャッチしたらできるだけすばやく返却する。徐々にキャッチし、ボールを止めている時間を短くしていく。

方法： ①学習者にボールを投げてもらい、それぞれ3、4回の示範を行い、その違いを学習者に尋ねる。②はじめは、2人一組で、3mほど離れ、一方が受けやすい山なりボールをなげ、もう一方が実施する。それぞれが20回行う。次にお互いがキャッチして各自20回行う。③3人一組となり、3m程度の三角形にてキャッチパスを行う。各方向20回づつ。④三角形の隊形で行う。各方向40回程度。

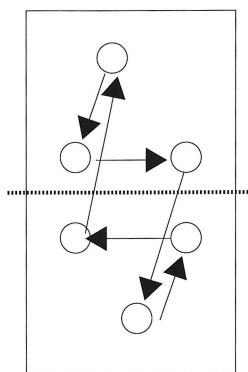
## 2-1 3段攻撃に発展するためのゲームにおけるパスの技術とサーブの技術

ねらい： ゲームにおける3段攻撃を実現するためのパス技術の習得

内容： 各コート3名になり、前衛2名、後衛1名の三角形の隊形をとる。片方の後衛が任意の位置より相手の後衛に向けてサーブを行う。できる限り相手の捕りやすい山なりボールを打つように心がける。サーブ技術は、両脚をネットと直角に立ち、腕を伸ばしてボールをセットし、胴体の長軸を中心とした回転とそのひねり戻し動作によって、打つ腕をしっかりと伸ばして打つ、ボールへ当たる場所やスウィングの方向や速度によってボールの方向や勢いに変化する。また、セットするボールの位置によっても打球の方向に変化する。

レシーバーはボールを右側の前衛にパスすることを第1目的とする。右側の前衛はもう一人の前衛にオーバーでパスをする。最後の者は相手のレシーバーにオーバーでパスをすることをできるだけ続ける。

方法： 3mくらいの3角形で行う。一つのポジションを5分ほど行ったら、ローテーションを行い、全員がすべてのポジションを経験する。



○ プレーヤー  
→ ボールの動き

## 2-2 防御的パスゲーム (3対3)

ねらい： アタック攻撃の無い、オーバーとアンダーだけによって、できるだけミスをしないうことを習得する。

内容： 3対3によるゲームで基本ポジションは前教材の2-1の練習でのポジションをとる。任意の位置からサーブを行う。サーブによるポイントやエラーは無しとし、自

<p>分のサーブや相手のファーストレシーブが失敗した場合はやり直しする。できるだけ、前の教材で学習した基本のパス回しをこころがける。できるだけミスをしてつづける。相手のポイントは、自分の失敗した回数であることを理解する。</p> <p><b>方 法：</b> 得点盤を使用し、得点をつける。10分間行う。</p>
<p><b>3-1 アタック</b>  <b>ねらい：</b> アタック技術を習得する。  <b>内 容：</b> セッターからのボールをアタックする。ジャンプのタイミングをつかむ。両足同時にジャンプする。打たない手を伸ばして、方向づけをする。打つ手はしっかりと伸ばして打つ。打点は肩より前で打つ。始めは、上方向に軽く打ち、打点をつかむ。慣れてきたら、徐々に下向きに打つ。打点がネットより低い場合は上方向に打つ。打点を前にすることによって、ボールが下向きになることを理解する。セッターにパスしやすい山なりボールを出す。アタッカーはどんなボールでも相手コートに返す。</p> <p><b>方 法：</b> 6人一組で、一人がセッターを行う。アタッカーに対して、右側からボールを出す。アタッカー群が2周（セッターが10回）上げたら、セッターを交代し、全員がセッターを経験する。セッターはオーバーハンドパスで上げる。</p>
<p><b>3-2 アタックを用いたゲーム（3対3）</b>  <b>ねらい：</b> アタックを用いて、積極的に加点することを目的とする。  <b>内 容：</b> ゲームにおいて、積極的にアタックを打ち、得点することを試みる。得点した場合は、積極的に喜び、失敗した場合はそれを引きづらないように励ましあう。  <b>方 法：</b> 3対3で行う。15点までとする。サーブによる得点やミスはやり直しとする。サーブはエンドラインから打つ。</p>
<p><b>4-1 ブロック技術</b>  <b>ねらい：</b> ブロック技術の習得  <b>内 容：</b> ネット際でネットを触らないようにして、手を肩の横ぐらいいで構える。相手のアタックのタイミングに合わせて、ジャンプし、手首を屈曲してボールを床に落とすようにする。ブロッカー同士の腕と腕が離れないようにする。相手のアタックの場所にに応じて左右へ移動する。相手のアタックがネットよりかなり離れている場合は少し遅れて跳ぶ。相手のアタックがほぼネットに近いところであれば、同時に跳ぶ。</p> <p><b>方 法：</b> 6人一組により、一人がセッター二人がブロッカーを行う。3名のアタッカーが3周したら、アタッカーの一人がセッターとなり、セッターはブロッカーとなり、ブロッカーの1名がアタッカーへと移動する。全員がすべての場所を経験する。</p>
<p><b>4-2 ブロックを用いたゲーム（4対4）</b>  <b>ねらい：</b> 相手アタックに対して、積極的にブロックすることを試みる。  <b>内 容：</b> 試合中にできるだけブロックを跳ぶことを心がける。サーブによる得点をありとする。  <b>方 法：</b> ラリーポイント15点で、対戦相手を変えて、2ゲーム行う。</p>
<p><b>5-1 リーグ戦</b>  <b>ねらい：</b> アタック攻撃とそれに対する防御による盛り上がりのあるゲームを行う。  <b>内 容：</b> リーグ戦を行う。試合前と試合後に作戦会議と反省を行う。  <b>方 法：</b> ラリーポイントで15点で行う。デュースは17点までとする。</p>

#### 4. 授業評価論

授業の評価方法として、先述の高村の観点に立ち、以下の視点で評価する。

- 1) 授業が教授プログラム通りに進行したか。
- 2) 適切な評価問題により学習者の達成度を評価する。

これは、最終ゲームのリーグ戦におけるアタック攻撃とブロック攻撃によって評価する。

- 3) 学習者のアンケート調査によって授業が学習者に歓迎されていたのかを評価する。

### Ⅳ 授業結果

前節の評価論に基づき、授業の評価を行う。

1. 授業が教授プログラム通りに進行したか。

これは、教授プログラムの通りに進行することができた。

2. 学習者の達成度

本来、学習者の達成度を前節の評価論に基づき、アタック回数とブロック回数を正確に記録し、算出すべきであるのだが、実践的な授業において、それを調査することを今回はできなかった。しかしながら、筆者の観察によると、最終ゲームのリーグ戦においては、アタック攻撃・ブロックがかなりの頻度で行われた。感覚的ではあるが、ラリーが3回行われるうちに1度位の割合でアタック攻撃が行われ、アタックに対して約60%以上のブロックが行われていたと判断する。また、ゲーム自体も白熱し、盛り上がり、そして、なによりも学生達がいきいきと、積極的に、そして楽しそうに取り組んでいた。以上のことから、教授プログラムの目標が達成できたと評価する。そのことは次に述べるアンケート結果からも十分に読み取れる。

3. アンケート調査結果

最終授業終了後の「この授業全体を通しての感想を書いてください」というに自由記述のアンケート調査において以下のような回答が得られた。

「5回という限られた授業数の中で（しかも週1回）、自分が思っていたよりも成長できた」  
 「始めは知らない人ばかりでパスをするだけで気をつかってしまったりと体力的・精神的に疲れてしまったけど、この授業のおかげで友達も増えた」、「先生の授業は最後まで本当に疲れたけど、達成感も大きく終わった後は本当に楽しいと思いました」、「バレーの基礎を身につけることができました」、「みんな上達していくにつれて本気で試合をするようになってとてもよかった」、「もっとソフトバレーの授業をやりたいなー」、「毎回、チームを変える事によって多くの人と友達になれて良かったです」、「最後の試合のときは、サーブも調子よくてみんなもアタックが決まって楽しかった」、「失敗したときもみんなで声をかけあってたからいい雰囲気だった」、「始めの頃よりもブロック、サーブ、アンダー、オーバーなど基本的なことが少しづつできるようになった」、「授業が5回しかないのがざんねんだった」、「わかりやすい指導だった」、「6回の授業があつという間だった」、「とにかく楽しくできたので良かった」、「スポーツをすることですごくストレスの発散になったし、あらためてスポーツのたのしさを知れた」、

「これから何かの機会があればバレーをしていきたい」、「全体を通して、この授業は教員になったときにどういうふうに教えれば生徒は楽しくできるんだということがわかった。つまり、先生の教え方が上手ってことです。技術も身についたし、友達も増えたし、まさに体育の醍醐味ですよー。本当に楽しかったし、ためになる授業をありがとうございました」、「一番最初に比べたらみんなすごくうまくなった」、「この授業では自分の技術を上げることができた」、「自分は今まではバレーに苦手意識があったけど、ソフトバレーは思ったよりもやりやすく、苦手意識をもたずにできた」、「もし、これからレクリエーションの計画を立てる機会があったら、ソフトバレーもその内容として考えてみたい」、「この授業の目的である『バレーボールの楽しさを教える』を実感することができました」、「短期間で皆レベルアップした」、「すごくチームワークがよく、みんな協力し合ってプレーできた」、「はじめは、ソフトバレーあまり乗り気ではなかったんですが、やっていくうちにどんどんたのしくなってきました。たぶん、みんな一生懸命練習して上達したからだと思います」、「たった5回の授業だったけど、とてもためになった。アタックがうてるようになったし、ボールコントロールができるようになった」、「硬いボールのバレーもやりたくなった」、といった肯定的な意見が多かった。

残念なことに、今回のアンケートに関しては、否定的な面や改善点に関する意見がでてこなかった。他の授業実践においては、「説明が長い」などの指摘があったが、今回はみられなかった。これらの結果から、今回の授業は学生に対しておおむね肯定的に受け入れられたと評価できる。

以上、3項目の評価から、ここに示した教授プログラムは有効であったと評価する。

## V お わ り に

以上、運動（スポーツ）文化の継承・発展を中心に据え、生涯学習につながる体育授業を目指して、ソフトバレーボールを取り上げ、教授プログラムに基づく授業を行い、その検証をおこなった。授業において、学生は目標とした、「アタック攻撃による攻防によるゲーム」を行うことができ、ソフトバレーボールの本質的な価値を理解し、十分に享受したと考える。そして、生涯学習へと発展することの可能性も示唆された。

今回の授業においては、その客観的な評価結果を示すことができなかったことが課題としてあげらる。今後は、それらを改善するとともに、他の様々な運動（スポーツ）文化（ゴルフ、スキー、バトミントン等）における授業に関する教授プログラムの授業検証を行っていきたい。

## 謝辞

本研究においては、当研究所塩田英樹研究員、本学体育管理センター職員板橋睦さんの2名には、授業の準備、ビデオ撮り、アンケート収集などの面において、多大なるご協力をしていただき、ここに記して感謝の意を表します。また、お二人の今後のご活躍を心から祈念申し上げます。

### 参考・引用文献

- 1) 久保健「文化としての人間の身体を育てる視点から」、『楽しい体育の授業』、97号、p.101～104、1998年。
- 2) 進藤省次郎「体育教育における運動技術の習熟・認識の位置」、『運動文化研究』、13号、p.74～77、1995年。
- 3) 丹下保夫『体育原理（下）』、逍遙書院、1961年。
- 4) 高村泰雄編著『物理教授法の研究』、北海道大学図書刊行会、1987年。
- 5) 伊藤高弘「スポーツの構造と認識」、『スポーツの自由と現代（上巻）』、p.3～15、青木書店、1986年。
- 6) 鈴木秀一・須田勝彦「基礎学力の指導過程」、『講座・日本の教育6』、新日本出版社、1976年。
- 7) 井芹武二郎「テニスサービス指導の授業書について」、『教授学の探求10』、北海道大学教育学部教育方法、1992年。
- 8) 井芹武二郎「平泳ぎ泳法の指導について」、『北海道大学教育学部紀要』、第55号、1991年。
- 9) 井芹武二郎「クロール泳法の指導について」、『名寄短期大学紀要』、第23号、1992年。
- 10) 進藤省次郎「とび箱運動における技術指導体系に関する研究（1）」、『北海道大学教育学部紀要』、第51号、1988年。
- 11) 学校体育研究同志会編『バレーボールの指導』、ベースボール・マガジン社、1972年。
- 12) 教授プログラムを作成にあたっては、進藤省次郎の北海道大学における授業実践を参考とした。
- 13) 久世たかお「ラグビー・フットボールの指導について」、『北海道大学教育学部紀要』、第75号、p.253～277、1998年。